

# 若者は再び政治化するか

大妻女子大学 小谷敏

## 1. 「抗議する若者たち」の出現

「失われた10年」以降の日本の若者たちは、大変な窮境におかれてきた。経済の停滞のなかで「フリーター」と呼ばれる非正規雇用の若者たちが多数生まれていた。しかし00年代の初頭、そうした若者たちを待ち受けていたのは、同情ではなくむしろ非難だったのである。非正規雇用増大の原因は労働市場の収縮によるものではなく、若者たちが質的に劣化した（怠け者・無能者が増えた）からだ、という言説が幅をきかせていた。指導的な社会学者のなかには、依存的な若者の存在それじたいが、日本経済の停滞の原因であると主張するものさえいたのである。

しかし、00年代の後半になると顕著な変化がみられるようになった。若者を不当に貶める「俗流若者論」に反論する若い論客が出現した（後藤 2008）。生存ぎりぎりの経済状態におかれ、「プレカリアート」（雨宮 2007）と自らを規定する若者たちの真剣だがユーモラスな抗議行動も各地で生まれている。もちろん、若者の現状についての知的な議論に参画し、ユニークな直接行動に関わっている人たちが、若者のなかの多数派ではないだろう。しかし、「若者を見殺しにする国」（赤木 2007）に対する若者たちの抗議行動がようやく活性化してきた。日本の若者たちは、「ポスト団塊の世代」以降、政治に背を向け続けてきた。その意味からも、言論と行動によって社会のあり方を変えようとする「抗議する若者たち」の出現には意義深いものがある。

## 2. 先行世代の負の遺産

それでは若者たちの抗議行動のうねりは、さらに大きな広がりをもつようになるのだろうか。その点についてはおよそ楽観的なことはいえないだろう。若者のさらなる政治化を阻む壁は何か。それを主としてこの国の世代間関係と権力構造という観点から論じることが本報告の課題である。男性と女性。有名大学を卒業した若者とそうではない者。正社員と非正社員。「ロスジェネ」と「ポスト・ロスジェネ」。東京圏の若者と地方の若者。日本の若者たちは性差・学歴・出生年・雇用形態等々によって分断され、根強い相互蔑視の念を抱いている。

また日本の若者の反乱は連合赤軍事件が象徴する惨めな挫折に終わった。その後にあられたポスト団塊世代（「しらけ世代」・「新人類世代」）は、政治に背を向けて豊かな消費社会の受益者となっていたのである。80年代以降、この国からは政治的な議論や運動はほとんど姿を消してしまった。いまの若者たちは、政治行動を行う大人の背中をみることなく育った世代ということになる。抗議行動の様式や、運動のレトリック、さらには連帯のあり方に至るまで、お手本とすべきものが若者たちにはない。

このことも若者たちが連帯し、抗議行動を行うことを困難にしている要因である。

### 3. 真に「強大な敵」としての日本権力構造

若い論客たちによる「俗流若者論」批判に対して、論者は優れたものとして高く評価する反面、彼らは本当の敵を見誤っているのではないかという危惧を抱く。たとえばある若い論客は、俗流若者論を「強大な敵」（赤木 2007）と呼ぶ。果たしてそうだろうか。若者を貶める言説の背後には、何かより大きな力が存在するのではないか。その「より大きな力」こそが、若者たちにとっての真に「強大な敵」なのではないか。「より大きな力」とは硬直的な日本の権力構造である。論者はそう考える。

バブルの崩壊に伴って工業化＝経済成長の時代は完全に幕を閉じた。経済成長が終わり、日本経済が成長を止め、労働市場が収縮していけば、新規参入者としての若者たちは企業社会から排除されることになる。これが「失われた10年」に起こったことである。経済成長路線に変わる新しい経済の仕組みを作り出すことがこの時代の課題であり、それが若者を救う道だったであろう。しかし硬直的なこの国の権力構造は、新しい経済の仕組みを構想し、経済成長路線を転換していく意思も力ももたなかった。

それまで包摂的だったこの国の経済システムは、バブルの崩壊と同時に、はっきりと排除的なそれに転換していった。多くの人々に経済成長の果実を配分することが、この国の権力構造の正統性の基盤となっていた。だから権力の側に立つものたちは、若者の社会的排除という事実を認めるわけにはいかない。そこで、経済成長路線は「がんばり」（「プロジェクトX」をみよ！）によって持続可能であり、非正規雇用が増えたのは若者の質的劣化によるものだというキャンペーンが行われたのである。「俗流若者論」は若者の社会的排除を正当化する言説装置であったといえる（小谷 2008）。

### 4. 大人は再び政治化するか

硬直的な日本の権力構造が、若者たちにとって「真に強大な敵」であると論者は述べた。しかし日本の権力構造を変えていくことは、到底若者たちだけなしうることはない。まず大人たちがアクションを起こさなければならないだろう。政府批判の集会が長きにわたって続く韓国や、アンチグローバリズムの運動の盛んなフランスなどに比べて日本の大人は異様に大人しい。どうすれば大人たちが再び政治化するのかが、問われなければならないだろう。そして大学人の果すべき役割についても言及したい。

後藤和智 2008 『「若者論」を疑え!』 光文社新書

雨宮処凛 2007 『生きさせろ！－難民化する若者たち』 太田書店

赤木智弘 2007 『若者を見殺しにする国－私を戦争に向かわせるものは何か』 双風社

小谷敏 2008 『子どもたちは変わったか』 世界思想社